

公益社団法人足立法人会会長賞

「一二八万キロの案内人」

足立区立渚江中学校

三年 廣瀬 美月

私たちはどこへ行くのにも必ず道路の上を歩く。歩いて学校へ行ったり、駅やバス停に行ったり。電車やバス、自転車だって道が整備されていなければ快適に進むことはできない。私たちのあたりまえの毎日を支えているのは、公共事業に使われている税金なのだ。

日本国内の道路の総延長は約一二八万キロ。地球三二周分にも及ぶ。これらの道路は全て税金によって作られている。主に揮発油税、石油ガス税、自動車重量税だ。揮発油税は、自動車の運転に必要なガソリンにかかる税であり、その全額が道路整備に当てられている。つまり、普段自動車を利用する人々のおかげで快適な暮らしができているということだ。また、信号機や横断歩道、ガードレール、カーブミラーなども税金でできている。もし信号機が無ければ交通事故が頻繁に起こり、ガードレールが無ければ歩行者が安心して歩くことはできない。これらがあるのは税金があり、造ってくれる人がいるからだ。

私が小学校の頃、毎日歩いていた通学路に細い一方通行の道があった。そこは角を曲がるまで自動車や自転車の姿が全く見えず、歩道の白線やガードレールもガタガタだったため、親や先生から「気をつけなさい」とよく言われていた。ある日、カーブミラーが設置され、更に白線やガードレールが真っすぐに直され、見違

えるほど綺麗になった。それから怖い思いをすることは無くなり、今もよく利用している。

一つの道が整備されたことにより何人もの生活が豊かになったと考えると、税金の意義を見つけられたように思う。ただ納めているのではなく、私たちが安心して生活できるというお金では買えない価値を守ってくれているのだと思うと、税をより身近に感じることができる。

二〇一一年の東日本大震災や二〇一六年の熊本地震、台風や集中豪雨などで崩壊した公共施設の復旧や、まちの復興にも税金による援助が必要不可欠であり、税金を通してボランティアなどに行けない地域の人でも助けることができる。こうした人と人の繋がりがりや助け合いがあたたかい社会をつくっていくのだと思う。

私は税について調べるまで、税金はとられている、という思いが強かった。しかし税を納めることによって、間接的に誰かの助けになっているのなら嬉しい。私も納税を通してあたたかい社会を築き、次の世代へ繋いでいけるようになりたい。